

穏やかな懐疑主義を可能にするもの

—古代懐疑論の再検討(1)—

安田将(日本学術振興会・京都大学)

古代と近代の懐疑論を、実践から懐疑を切り離す後者に対して、前者は実践において信念を疑うことを重視したというおおまかな対比がなされる。この図式の有効性に対しては再検討の必要が以前から唱えられている。研究者たちは、近代初期のピュロン主義の影響を調べる哲学史的な研究、ならびに古代と近代の懐疑論の理論的な比較をする哲学的な研究に取り組むことで、単純な対比に陥らない仕方で古代および近代の懐疑論がもつ哲学的・哲学史的な意義を捉えようとしている。

私もこの方向性をとるが、特に次の仕方でアプローチを試みる。私は古代の懐疑論が生じてきた思想史的背景を重視し、前4世紀後半から後3世紀初頭までの哲学・思想史の諸潮流のなかにアカデメイア派およびピュロン主義を置くことで、古代の懐疑論の実践的特徴を(その内部の差異を含めて)捉え直す。その作業をした上で近代や現代における懐疑の変容をも考察したい。その際、近代初期におけるピュロン主義の導入が引き起こした種々の反応、デカルトの懐疑の方法の(古代懐疑論や、中世の認識理論との対比からみた)理論的な革新性、現代に至る認識論的議論における懐疑論の扱いの三点について先行研究の知見をできるだけ広く参照する。まず本発表では、穏やかな懐疑主義(moderate scepticism)を取り上げる。(本発表に続く発表として、ピュロン主義やその背景思想について規準および表象の概念、相対主義と懐疑主義の関係を扱う二つを予定している。)

穏やかな(もしくは緩和された(mitigated))懐疑主義を、次のような知的態度であるとする。確実ではないことを理解している(それゆえ異論により修正される)が、理にかなっていると認める(それゆえ異論によって直ちに修正されるわけではない)という仕方で、自身の信念をもつことを可能にする知的態度である。不安定でも硬直的でもないしなやかな信念をもつことを可能にするこうした立場が、近代において古代のアカデメイア派の一部に見いだされた(代表的にはヒューム)。この場合、穏やかな懐疑主義はすべての信念の差し控えに至るピュロン主義と対比される(これに類する用法では、建設的な懐疑主義と呼ばれることもある)。また現代の徳認識論において意見対立の場面で発揮されるべき知的な徳として古代懐疑論に穏やかな懐疑主義の立場が帰されることもある。こちらの場合、偽でありうる信念を偽であるとみなして一挙に棄却するデカルトの方法的懐疑と、経験範囲内で個別的信念を吟味する(それゆえ実践における信念が問題になる)古代懐疑論全般が対比される。いずれにせよ懐疑を合理的に実践する穏やかな懐疑主義は、知識や信念をめぐる古代の思考のうちの有力案の一つである。

しかしながら、穏やかな懐疑主義は、一見した以上に高い水準の知的な能力を要求する。本発表では、このことを古代懐疑論の歴史背景および展開をみることによって示したい。

(1)まず、穏やかな懐疑主義に相当する立場の古代懐疑論全般のなかでの特徴を示す。偽でありうるが理にかなっていると認められる信念をもつことに、気まぐれでもかたくなでもない適度な柔軟さをキケロは『アカデミカ』などの著作で見いだしている。そこではアカデメイア派に、(i)ピタノン(pithanon, probabile)がもつ説得性には真理への近さとしての蓋然性が含まれるという考えが帰されている。この(もしかするとトリサのピロンに従った)カ

ルネアデスの立場についての理解と、カルネアデスの元々の立場との合致は疑わしい(疑念が及ぶ範囲は解釈によって異なる)。また、(偽でありうるが理にかなった)信念をもつことに積極的意義を認める考えは、ピュロン主義にはない。さらにキケロは(ii)偽でありえないという確証が得られない信念を(理にかなったものであるかぎりでも)もつことができるための条件として、それが議論によって方法的に発見されることを挙げている。したがって、穏やかな懐疑主義は、(i)ピタノンの性質に関してアカデメイア派内部でカルネアデスに帰された一部の見解と、(ii)議論によって信念を吟味する特定の手法とを組み合わせる特徴をもっている。

(2)続いて、アカデメイア派が取り組んだ哲学的な中心課題を明らかにする。ストア派は神からの恩恵として本来的に善い理性が詭弁および習慣の影響によって誤用されることで誤謬を含む知的悪徳がもたらされると考え、理性の本来的な使用としての問答法には議論によって惑わされて偽なる表象へ同意することのない「揺るぎなさ」の徳が含まれると考えた。議論の説得性が(詭弁や習慣によって生じる)にせの説得性であるか否かを、理性が判定することで、人は信念を吟味できる。そしてそうした理性使用の完成が問答法を含む知恵であり、哲学はこれを目的とする。したがって、偽でありえない表象の認識可能性の否定は、説得性の真偽判定の可能性の否定であり、理性のしかるべき使用可能性の否定であり、それゆえ哲学の否定である。これに対して、カルネアデスらはアカデメイア派の哲学を次のように擁護した。種々のパラドクスが示すとおり問答法は自己矛盾した技術であるため、理性が真理規準であることを理性自身で保証することはできず、それゆえ誤謬などの知的悪徳を理性の外部に求めることはできないが、しかし同時に、偽でありえない表象を把握せずとも説得性の程度を理性によって判定することができ、行為において従うべき説得的表象(ピタノン)を技術的に見いだすことができ、それゆえ生の技術としての哲学が成立しうる。このように、アカデメイア派が取り組んだ中心的な課題は、自己保証する真理規準(としての理性)なしの哲学を擁護することである。

(3)以上を踏まえて、穏やかな懐疑主義がアカデメイア派にとつてのこの課題への取り組みの結果として提示されたものであることを示した上で、それによって生じた重要な特徴を指摘する。完成した理性としての知恵が言葉の意味から独立な共通観念(koinē ennoia)を内容とし、それゆえ議論の説得性によって揺るがせられない知的な徳が(知恵の一部としての)問答法に含まれるというストア派の考えに対して、キケロは別の仕方で議論の説得性の判定が可能だと論じた。すなわち人々によっておおまかに共有されている言葉の共通の意味理解(sensus communis)を明確に認識するとともに表現することによって、説得的であるがゆえに(言葉の共通の意味理解にもとづくために)真に近い議論が作り出される。これによって信念の説得性の吟味を、言葉の意味から独立な真理規準(としての理性)なしで方法的に遂行できる。偽でありうるが理にかなった信念をもつことそのものが、言語運用に関わる(たんに認識的ではない)知的な徳を要求するのである。

以上より、穏やかな懐疑主義はたんなる弱められた疑念ではなく、むしろ理にかなっているがゆえに硬直的でも不安定でもないしなやかな信念をもつことができるためには、言葉の意味をよく捉えた仕方で言葉を用いる知的な徳を、他者と言葉を交わす場において発揮できることが求められる。